



# バブルの頃のこと

黒木和彦\*

巻頭言と銘打つてものするのは少し荷が重い気がするのですが、日本で起こった経済の「バブル」と、その後続いた「失われた10年」の間に見聞きした事をいくつか書いてみようと思う。海洋化学とは無縁の世界のできごとである。

最初に、昨日千秋楽を迎えた令和6年春場所で尊富士が優勝した事を本当に喜びたい。新入幕で優勝するのは110年ぶりということなので大変な偉業なのだと思う。白鵬が引退したあと、照ノ富士は膝が十分ではなく、このままでは大相撲が衰退するのではないかと心配していたのだが、大関琴の若の誕生を始め、熱海富士、大の里、尊富士、など若い力士が続々と台頭してきており、世代交代が起こりそうである。

世代交代は組織の活力を保つためには欠かすことのできないプロセスである。1990年にバブルが崩壊してから30有余年、長く経済低迷の時期が続いた。これだけ長く続いたのは、所得倍増計画、列島改造論と続いた流れの中で、エコノミックアニマル、ワーカホリックなどと揶揄されながらも日本経済を拡大させてきた団塊の世代の成功体験がその一因ではないかと思う。もとより全くの私見なので証拠などは何もないが、そういった自負が円滑な世代交代を妨げた可能性があると考えている。

私は、バブルと「失われた10年」を企業で過ごしており、いま冷静に考えるととても信じられないような事をいくつも見聞きした。信じられないようなできごとの最初には、「北浜の女帝」の

起こした詐欺事件を上げることができる。たった一人で1000億円単位のお金を集め、自由に運用し、最後には巨額の負債を抱えた詐欺事件である。正気とは思えないできごとであった。毎日、毎日、株が値上がりし、株を買わない者はバカだといわれた時代で、私の同僚にも株で大もうけをし、そのお金を使って静岡県の川奈までゴルフをしに行っていた人がいた。中ノ島の朝日新聞の屋上からチャーターヘリで川奈まで飛んで、ラウンドした後、そのヘリで大阪まで帰ってきたと自慢気に話をしていただのを覚えている。川奈ゴルフクラブは、廣野ゴルフ倶楽部と1、2位を争う名門クラブで、そこでプレーをすることが夢だったのかも知れないと思った。自分で稼いだお金をどう使おうと勝手なので、口をさしはさむ筋合いはないけれども、随分と豪快なお金の使い方をするものだといささか呆れた。

持ち株が高騰し、その結果、評価額が途方もない金額になることも珍しくなかった。しかしそれは評価上の利益であって現実の利益ではない。本来ならどこかで株を手放して利益を確定させる必要があるのだが、「売れば1億、売れば2億」といった考えがやがて金銭感覚を麻痺させ、普通なら手の届かないような贅沢品を買う人もでてきた。「もうはまだ、まだはもう」という相場格言は、売買の時期の難しさを語ったものだ。毎日値上がりする株を手放すには大きな決断がいる。その決断ができないまま、借金までして消費に走った人は「いざとなったら株を売れば借金などいつでも返

\*公益財団法人海洋化学研究所理事

済できる」と考えていたと思う。しかし、やがてバブルは崩壊し、売る機会を失った人の手元には価値のなくなった株券と借用書だけが残ることになった。

2000年頃の大阪城公園には青シートのテントが何百と並んだ。公園を通り抜けるのを躊躇するくらいの数だった。帝国ホテルから見える大川の辺にも青シートが列を作っていた。不況に見舞われ職を失った人がテントの住人の大半であったことは間違いないが、バブルに踊らされ、バブルに

殺された人も少なからずいたと聞いた。借金取りに知られる事を恐れ、名前や家族の事など過去の事は一切喋らず、ただジッと耐えているだけの生活だったらしい。

そして今、数億円のタワマンが売り切れ、何百万円もするトレカが取引されている。バブルではないかと思う。1980年代のように、バブルに踊らされ、バブルに殺され、不幸な末路を迎える人がでるのではないかと心配である、私の心配が杞憂に終わる事を願っている。